

『恋の仮面舞踏会(マスカレード)』

著:名倉和希

ill: 乗りよう

「あの一、ここ、座ってもいいですか」

いきなり声をかけられて、光良は顔を上げた。街灯の光に照らされてベンチのかたわらに立っていたのは、四十代くらいと思われるくたびれた感じの男だった。よれているがスーツを着ている。頭髪はかなり薄く、分厚い眼鏡のレンズが反射して、どんな目をしているのか見えない。

「ああ、どうぞ」

光良はこの男も自分と同じように仕事で酒を飲み、酔いざましのために裏道を歩いているのかなと、勝手に解釈してベンチの片側に移動した。中年男は空いたスペースに座り、ひとつ息をつく。

「あの……………」

「はい？」

話しかけられてのんびりと男を振り返り、光良はギョツとした。驚くほど近くに、中年男の顔があった。なぜか鼻息が荒い。薄暗くてよくわからないが、顔がほんのり赤くなっているようだ。そうとう酔っているのかなと、光良は体調を心配した。

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です。あなたこそ、大丈夫ですか」

「俺は大丈夫ですよ」

「じゃあ、その、行きましょうか」

「は？」

どこへ？ 疑問を顔に浮かべた光良の手を、男はむんずと掴んできた。かなりの力で引っ張られ、光良は啞(あ)然(ぜん)としたまま立ちあがらされる。

「どこへ行くんですか」

「どこって……外がいいんですか？」

これ以上、飲むつもりはない。光良は深く考えずに、思ったままを答えた。

「外のほうが気持ちいいですけど。さっきのベンチが……………」

「寒いですよ」

「寒ってほどの季節じゃないですよ。このくらいがちょうどいいんじゃないですか」

酔いをさますのには。

男はびっくりしたように光良を振り返っている。だがその顔はすぐに紅潮し、呼吸はますます荒くなっていった。気色悪いなど、光良は初対面の男に眉(まゆ)をひそめる。

「あの……手を離してもらえますか」

「べ、別のところを握ってもらえるなら……………」

「は？」

本日二度目の「は？」だ。わけがわからなくて、光良は棒立ちになる。男は目の前でいきなりベルトを外しはじめた。躊(ちゆう)躇(ちよ)なくファスナーを下ろすのを目にして、光良はやっと事態が呑みこめた。

これはもしかして——もしかしなくても、貞操の危機か？ ゲイだと間違われて、この中年男にナンパされているのか？ ここはどこだ？ ふらふらしているうちに、とんでもないゾーンに迷いこんでしまったのか？

茫(ぼう)然(ぜん)としているうちに、男はイチモツを取り出していた。体格も容姿もたいしたことはないのに、それだけは立派なサイズだった。すでに半勃起状態になっている。鼻息も荒くにじり寄ってこられ、光良は悲鳴をあげそうになった。

「ちょ、ちょっと待って。なにか勘違いしているみたいなんですけどっ」

「いいから、私に任せて、気持ちよくしてあげるから」

「しなくていいっ！」

後(あと)退(ずさ)りしたら、さっきのベンチに足が引っかかった。ドスンと腰を下ろしてしまい、不本意にもベンチに半分寝転がるような体勢になってしまう。

「積極的なんだね」

「違うっ！」

男が覆いかぶさってきて、光良はどうとう絶叫した。

素面(しらふ)だったら難なく逃げられたかもしれない。だがかなり酔っていて、思うように手足が動いてくれない。男を退(しりぞ)けようにも、腕に力が入らなかった。そのうえ光良よりずっと体格が劣るくせに、男はコツを心得ているらしく、押さえつけ方がうまい。きっと、こういった場面に慣れているのだろう。

光良は長身だ。日本人男性の平均身長より高く、百八十五センチある。どんなに忙しくて最低週一でジムに行っているため、貧弱な体つきはしていないし、まだ腹だっで出ていない。

それなのに、酔っているせいで、くたびれた中年オヤジに申しかかられるなんて。

「うわ、うわ、ちょっと、待て！ 待ってっ！」

「すぐすむから、おとなしくして、ね」

ふうふうと鼻息をかけられながら、光良はベルトを外されてしまった。

「頼むから、勘弁してくれっ」

いよいよ危なくなると死にもの狂いに暴れはじめたときだった。

「おじさん、その子、放してやってくんないかなー？」

甘ったるく間延びした男の声が飛んできた。救世主かと光良が苦労して声のほうを振り向けば、そこにいたのは——真っ白いスーツを着て、白いシルクハットをかぶり、顔に妙な白い仮面をつけた男だった。

薄暗い公園で、異様に輝いて見えるのは、白い生地が発光しているせいかな？ いや、ただ眩(まぶ)しいくらいに白いスーツと、マントのせいだ。

マント？ なぜマント？ 白いスーツは、よく見るとタキシードだった。白い仮面は蝶(ちょう)が翅(はね)を広げたような形のもので、目の部分はくり抜かれている。顔の上半分が仮面で隠されていたが、若そうだというのはわかる。こんな裏道で仮装かと光良は茫然とした。

男はのんびりとした足取りで近づいてくる。そして優雅なしぐさで仮面を外した。現れたのは上品な雰囲気的美形だった。目が大きく、濡れたように輝いている。形のいい唇が優雅な曲線を描いて笑っていた。茶色い髪がふわふわと白い額にかかっている、全体的に浮世離れして見えた。

つまり、常識外れの服装だったが、妙に似合っていた。

「こんな往来でおいたはダメだよ。おじさん、家に帰れば妻子がいるんじゃないの？
誰に見られるかわからないのに、もう、やんちゃなんだからー」

若い男はくすくすと笑いながら、光良に伸しかかったまま硬直している中年オヤジの
背中をぽんと叩いた。弾かれたように起き上がり、勘違いオヤジはおろおろと乱れた
服装を直している。そして脱(だっ)兎(と)のごとく逃げ出した。

助かったのか……と、暗闇に消えていくたびれたスーツの後ろ姿を見送り、光良は
ぐったりとベンチにもたれかかる。

「お兄さん、大丈夫？ 災難だったねー」

仮装男はにっこりと微笑みながら、白いマントをばさりと後ろに弾ねあげて光良の前
に立った。近寄ると、めったにいない美形というだけでなく、芸能人のような華がある
のがわかる。

「ノンケなら、さっさとこの場を立ち去ったほうがいいよ。ゲイで、ヤリ目的で、さっきの
オヤジは単に好みじゃなかったっていうだけなら、止めないけど」

やはり、ぼんやりしている間に危険ゾーンに足を踏み入れてしまっていたらしい。
早々に安全地帯へと移動したいのはやまやまだが、いまのトラブルで余計にアルコールが回ってしまったらしく、立ちあがるのが億(おっ)劫(くう)だ。なんだか気分も悪くなっ
てきた。

「お兄さん、ちょっと、顔色が悪くなってる？ もしかしてリバーズしそう？」

「う……………」

弱々しく頷き、光良はてのひらで口を覆った。

「助けてもらいたい？」

光良は後先考えずにまた頷いていた。

「うわあ、それってさ、ヤバイよ。こんなところで弱っているのを見られたら、誰かにか
ぶっと喰われちゃうよ？ お兄さん、けっこうイケメンだし、ノンケっぽいし……。どうし
ようかな……俺の好みなんだけど……」

ひとり言めいたセリフを吐きながら、仮装男は光良の腕をそっと取った。

「——ねえ、よかったらさ、俺が介抱してあげようか？」

「か、介抱？」

「なにもしないよ。気分がよくなるまで、そばにいてあげるだけ。でもここじゃあ、もし吐
きそうになったときに面倒だから、ちゃんと洗面所があるところに行かない？」

そのときの光良は、かなり酔っていて、正常な判断ができなくなっていた。おまけに
中年オヤジに襲われて、助けてくれたこの男に気を許しかけていた。なにもしないとい
う、見ず知らずの男が口にした、信(しん)憑(びょう)性(せい)のまったくないセリフに縋
ってしまったのだ。

「おいで」

手を引かれて、光良はこのことについていった。

仮装男は光良より十五センチほど身長が低く、肩を貸してもらうにはちょうどいい身
長差だった。体重を預けて、ぐらりぐらりと頭を揺らしながら連れていかれた先には「ご
休憩」だとか「ご宿泊」だとか書かれた看板があったが、思考回路がショートしていた
光良には目に入った光景をまともに理解する力がなくなっていた。

本文 p15～22 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>